微少量グラファイト化ラインの検討 A new graphitization system for small-mass AMS ¹⁴C analysis

加藤ともみ ^{1*}・南 雅代 ²・中村俊夫 ² Tomomi Kato^{1*}, Masayo Minami², Toshio Nakamura²

¹名古屋大学理学部地球惑星科学科・²名古屋大学年代測定総合研究センター ¹Department of Earth and Planetary Science, Nagoya University, Chikusa, Nagoya 464-8602, Japan. ²Center for Chronological Research, Nagoya University, Chikusa, Nagoya 464-8602, Japan.

*Corresponding author. E-mail: katou.tomomi@e.mbox.nagoya-u.ac.jp

Abstract

A new graphitization system for small-mass sample (<0.5 mgC) has been developed. A new graphitization system equips six compact graphitization reactors with cold fingers. During graphitization, by-product water was trapped to the cold finger maintained at around -90° C. A fixed amount of ~1.5 mg of Fe catalyst and an increased H₂/CO₂ ratio of 2.5 were adopted, because the excess of H₂ gives a higher initial pressure which speeds up the graphitization reaction (CO₂+2H₂ \rightarrow 2H₂O+C). The resultant graphite was pressed into a new 1.50 mm-diameter hole of an aluminum cathode to have enough thickness of graphite to get high, long-lasting beam currents during Cs beam spattering.

To examine the new graphitization system, 0.07-0.55 mgC of oxalic acid standard materials HOx-II (distributed by NIST SRM4990C), two ¹⁴C standard samples of IAEA-C5 (cellulose) and IAEA-C8 (oxalic acid), and ¹⁴C-free HOx (Kishida ¹⁴C-free oxalic acid) were measured for ¹⁴C. For 0.20-0.55 mgC, nearly 100% graphite yield was obtained, whereas 70-100% for less than 0.2 mgC. The ¹²C³⁺ beam currents obtained tended to decline with sample size. However, the reliable ¹⁴C concentration was obtained by normalization of ¹³C/¹²C ratio. When the ¹²C³⁺ beam currents are less than 20 nA, the results are suggested unreliable. ¹⁴C-free HOx samples of 0.12-0.55 mgC showed contamination of 0.5-1.8 μ g MC. The new graphitization system improved in blanks, although smaller samples are slightly more subject to contamination.

Six international ¹⁴C standard samples of various ¹⁴C concentration, IAEA-C1, -C2, -C4, -C7, and -C8 of 0.3 mgC were measured for ¹⁴C to examine accuracy of ¹⁴C results of small-mass samples using the new graphitization system. The obtained ¹⁴C values were in good agreement with the consensus values, suggesting that the new graphitization system is efficient in accurate ¹⁴C measurements of small-mass samples.

Keywords: ¹⁴C; AMS; small-mass; graphitization キーワード: 放射性炭素; 加速器質量分析法; 微少量; グラファイト化

1. はじめに

名古屋大学年代測定総合研究センターでは、考古学、地球科学、環境学など様々な研究分野において木片、炭化物、化石骨、貝、地下水、堆積物などの多様な試料の¹⁴C測定を行っている。通常、

1.5 mgの炭素(以降、mgCと略す)を含む試料を用いて¹⁴C 測定が行われているが、近年では大気や アイスコア中の CO₂など、様々な分野でさらに炭素含有量の少ない試料の¹⁴C 測定の需要が高まっ ている。しかし、通常の方法で 0.5 mgC 以下の試料の測定を行うと、試料量の減少とともにグラフ ァイト効率が低下し(Hua et al., 2001)、大きく同位体分別を生じてしまう(Hua et al., 2001,南・中村, 2011)。その主な原因はグラファイトの生成が完全に行われないことによる同位体分別の影響であ り、また試薬や反応器から混入した炭素の影響を受ける場合もある。従って、微少量炭素の¹⁴C 試 料調製で最も重要なのが、試料 CO₂のグラファイト化効率の増大、ブランク値の低減である。試料 CO₂のグラファイト化は、反応系の低容積化、H₂/CO₂比の増大、生成した H₂O の効率的な回収に よって促進されると考えられる。すでに世界のいくつかの研究機関では、数 μ gC での測定が可能 となっている(Hua et al., 2004; Santos et al., 2007 など)。名古屋大学年代測定総合研究センターでも、 グラファイト化効率を上げるために反応系の低容積化、H₂/CO₂比の増大、 -100° Cでの H₂O の効 率的な回収、を可能にした新たな微少量グラファイト化ラインが構築され、本研究ではこの検討を 行った。検討として 0.07-0.55 mgC に調製した HOx-II、IAEA-C5、IAEA-C8、キシダ Dead シュウ酸 および 0.3 mgC の IAEA-C1、IAEA-C2、IAEA-C4、IAEA-C7、IAEA-C8 の測定を行った。

2. 実験方法

2-1. 新しいグラファイト化ラインについて

0.5 mgC 以下の微少量試料の分析のために新しく構築されたグラファイト化ラインでは、従来と同様に Fe を触媒として、H₂によって 620℃で CO₂の還元が行われる。新しいグラファイト化ライン(図 1-a)は左右それぞれ 6 ヶ所、計 12 ヶ所にグラファイト化反応器(図 1-b)を取り付けることができる。 その中央に二ヶ所の試料導入口と、真空ポンプ(ターボ分子ポンプ)、H₂ 導入口が接続されている。 ロータリーポンプからのコンタミネーションを避けるため、直接ターボ分子ポンプがラインに接続 されている。反応器の接続部分と試料引き込み口、H₂導入口、ターボポンプの接続部分はバルブに よって開閉する。十字型のグラファイト化反応器の上端にはそれぞれ圧力センサ(流体用圧力セン サ PSE560, SMC)が接続され、センサに接続された圧力センサコントローラで反応器内部の圧力を 常に読み取ることができる。従来は石英管に試料 CO₂と H₂を導入した後、石英管を封じ切るため、 グラファイト化の間の圧力を観察することは不可能だったが、新しいグラファイト化ラインでは圧 力変化によって個々のグラファイト化の経過を観察することが可能である。グラファイト化では、



Fig. 1-a. New graphitization system 図 1-a. 微少量グラファイト化ライン



Fig. 1-b. Graphitization reactor 図 1-b. グラファイト化反応器

真空圧から試料 CO₂の圧力(大気圧の 1.5 倍程度)まで測定する必要があるため、圧力センサコント ローラのレンジは連成圧に設定している。反応器の一端には約 1.5 mg の Fe 粉触媒(Sigma-Aldrich ~ 400 mesh)が導入されている石英管(外径 6 mm、長さ 5 cm)を接続し、この部分を炉によって加熱す る。反応器の下端には冷却用の石英管(外径 6 mm、長さ 5 cm)を取り付け、約-100[°]Cのエタノール /LN₂混合物を使用し、生成した水を急冷回収することで反応を促進させている。また、従来の直線 型の反応器と比較して、生成した水がグラファイトと接触してしまうことがない。石英管、圧力セ ンサと併せて、反応器の容積は約 4 mL で、従来の反応器(外径 9 mm、長さ 27 cm の石英管)の容積 約 12 ml と比較して小型である。試料 CO₂の還元に使用する H₂は従来の H₂/CO₂比 2.1 から 2.5 に 増やして反応を促進させている。

従来は Fe/C 比を 2-3 としていたが、この比を微少量試料に適用すると最終的に得られるグラファ イトが非常に少量になる。さらに、グラファイトを詰めるためのアルミニウムターゲットも従来の 2 mm 径の穴のものを使用すると、グラファイトに厚みがなくなるために、セシウムビームを照射 する過程でビームが得られなくなる。そこで、本研究では Fe 量は試料量にかかわらず一定の 1.5 mg とし、微少量炭素試料用のターゲットとして 1.5 mm 径の穴のアルミニウムターゲットを使用して いる。それに伴って、プレスの際の圧力も 2.5 kN から 1.4 kN 程度に変更した。

2-2. 微少量グラファイト化ライン用の炉

微少量グラファイト化ラインに接続する 6 つの反応器を同時に加熱するために、炉(本体 7.5 cm×35 cm×10 cm、脚 18 cm)を作成した。炉の上下、左右の面は幅 2.5 cm のアルミニウムの角材を 用い、前後の面は厚さ 5 mm のアルミニウム板を用いて箱を作成した。グラファイト化ラインに接続した反応器の石英管がちょうどはまるように、前面に直径 8 mm の穴を 5 cm 間隔で 6 つ開けた。 背面も配線と、熱電対の取り付けのための穴を 6 つ開けた。内径 1 cm、10 cm の陶器の筒の外側全 体に一定の間隔で導線(直径 0.50 mm、5.58 Ω/m)を巻き、箱に開けた 6 つの穴に合わせて固定、その 周りを覆うように断熱材を箱の中に詰めた。それぞれを直列に配列し、120 V に設定したスライダ 一、電子温度調節器と接続した。電子温度調節器には熱電対を接続し、6 つの炉のうち、2 番目の 炉(向かって左から 2 番目のグラファイト化反応器に対応する炉)の背面から熱電対を入れることで 炉の温度を測定、調節する。

炉の温度は背面から入れた熱電対によって測定、調節を行っているが、実際に反応器を入れる前 面の温度とはややずれが生じる。反応器は先端からおよそ3 cm 炉内に入れるため、この時の温度 を別の熱電対で実際に測定した。

2-3. 試料

本研究で使用した試料は以下のとおりである。

- ・HOx-II(シュウ酸、NIST SRM4990C、134.05 pMC)
- ・IAEA-C1(大理石、0.00±0.02 pMC)
- ・IAEA-C2(トラバーチン、41.14±0.03 pMC)
- ・IAEA-C4(木材、0.20-0.44 pMC)
- ・IAEA-C5(木材、23.05±0.02 pMC)
- ・IAEA-C7(シュウ酸、49.53±0.12 pMC)
- ・IAEA-C8(シュウ酸、15.03±0.17 pMC)
- ・¹⁴C-free HOx(シュウ酸、キシダ化学)

2-4. 試料調製

新しいグラファイト化ラインの検討を行うために、HOx-II、IAEA-C5、IAEA-C8、¹⁴C-free HOx の分析を行った。炭素量の異なる試料をグラファイト化したときの¹⁴C 測定結果やブランク値の比較を目的としているため、約3 mgC の試料を燃焼、精製したのちに 0.07-0.55 mgC に分割したもの をグラファイト化している。試料 CO₂は 0.075-0.081 mgC、0.11-0.12 mgC、0.15-0.17 mgC、0.20-0.25 mgC、0.35-0.37 mgC、0.50-0.55 mgC に分割した。分析を行った試料の炭素量、鉄粉量を表 1 に示す。

表1. 炭素量を変化させた時の¹⁴0 測定結果 Lab. Code ²C³⁺(nA) Sample C (mg) Fe (mg) ¹⁴C conc. (pMC) error (NUTA2-) Run 1 Run 2 Run 3 <u>(1 σ</u>) HOx-II a) HOx-II-7-1 0.516 1.47 134.71 0.47 17614 162 141 168 HOx-II-7-3 0.351 135.61 17608 1.55 0.61 93 61 40 HOx-II-7-5 0.239 1.47 136.19 0.73 17609 54 59 20 45 43 39 HOx-II-7-7 0.162 1.70 132.16 17610 0.67 HOx-II-7-9 0.110 1.56 132.77 D.84 17611 26 31 17 HOx-II-7-11 0.075 1.44 133.25 0.82 17612 53 25 16 0.547 193 190 b) HOx-II-7-2 1.30 134.65 0.54 17936 _ 0.372 1.58 134.56 0.55 17934 142 HOx-II-7-4 168 HOx-II-7-6 0.253 1.12 133.48 0.57 17937 147 82 HOx-II-7-8 0.172 1.39 133.96 17938 110 48 0.62 HOx-II-7-10 0.117 1.45 131.99 0.73 17939 55 24 0.080 128.29 17940 39 HOx-II-7-12 1.44 0.84 14 1.59 134.20 17943 c) HOx-II-8-1 0.517 D.54 166 178 HOx-II-8-3 0.352 1.25 132.78 0.56 17941 134 122 17942 85 HOx-II-8-5 0.239 1.51 133.94 0.60 111 HOx-II-8-8 0.172 1.50 134.99 0.63 17944 94 53 9 HOx-II-8-9 0.111 1.23 126.80 0.93 17945 26 HOx-II-8-11 0.075 1.33 129.93 17946 27 15 0.86 134.35 17636 29 sTD100514-1-6 0.231 1.30 0.77 118 91 0.260 1.57 132.27 0.60 17637 106 STD6-4 STD100514-1-3 0.375 1.57 133.10 D.52 1763 182 163 STD6-1 0.380 1.71 131.12 0.54 17640 180 113 STD100514-8-1 0.50 0.500 2.10 133.00 17641 202 209 IAEA-C5 d) IAEA-C5-1 0.492 1.42 22.83 0.15 17621 177 128 117 IAEA-C5-3 0.355 1.59 22.79 0.15 17623 146 109 138 IAEA-C5-5 0.241 1.62 23.00 0.18 17624 140 131 IAEA-C5-7 1.56 22.49 0.21 17625 95 0.164 99 22.53 17626 73 IAEA-C5-9 0.112 1.30 0.24 59 1.56 0.28 17627 IAEA-C5-11 0.076 22.77 57 47 IAEA-C8 e) IAEA-C8-1 0.464 1.20 14.98 0.13 17615 116 89 113 IAEA-C8-3 0.315 1.33 14.86 17616 0.14 112 84 69 14.93 IAEA-C8-5 0.215 1.55 0.15 17617 73 80 80 IAEA-C8-7 14.56 62 0.146 1.36 0.16 17618 91 60 IAEA-C8-9 0.099 1.40 15.06 0.26 17619 31 30 19 IAEA-C8-11 0.068 1.25 14.89 0.17 17620 70 55 51 1.59 192 h) C8-3-1 0.480 14.97 17644 0.12 188 C8-3-5 0.210 1.48 14.73 17646 88 69 0.18 ¹⁴C-free HOx f) Dead-1 0.554 1.19 0.46 0.02 17635 180 191 Dead-3 0.377 1.65 0.60 0.02 17628 149 157 Dead-5 1.58 0.256 0.57 0.03 17629 114 112 Dead-7 0.174 1.43 0.55 0.03 17632 109 87 Dead-11 0.081 1.01 2.68 0.40 17634 74 47

Table 1 ¹⁴C results of standard samples

また、微少量炭素試料の測定の検量線を作成するため、0.3mgCの IAEA-C1,-C2,-C4,-C7,-C8 と HOx-II、¹⁴C-free HOx の測定を行った。IAEA-C1, -C2 は、濃リン酸1ml とともに二又管のそれぞれ の枝に導入し、二又管の内部を半日真空にした後、一晩反応させる。IAEA-C4, -C7, -C8 は約 100 mg の CuO、銀線とともに 0.3mgCの試料量を石英管に封じ切り、CO₂化した。この時、燃焼の際の反 応器の容積を小さくするために、石英管は約 16 cm に封じ切った。真空ラインで CO₂の精製を行 った。HOx-II は 6 試料、¹⁴C-free HOx は 2 試料を調製し、それぞれにグラファイト化を行った。分 析を行った試料の炭素量、鉄粉量を表 2 に示す。

Table 2 ¹⁴ C	results	of standard	samples	of 0.3	mgC
-------------------------	---------	-------------	---------	--------	-----

表	2.	0.	3mgC	の試料の	¹⁴ C 測定結果
---	----	----	------	------	----------------------

. .

Sample	C (mg)	Fe (mg)	¹⁴ C conc. (pMC)	enor	Lab. Code	¹² C ³⁺ (nA)		
			-	(lσ)	(NUTA2-)	Run l	Run 2	Run 3
IAEA-C1-1	0.281	1.51	0.10	0.02	18047	89	101	80
IAEA-C1-2	0.295	1.59	0.12	0.04	18048	45	51	24
IAEA-C2-1	0.349	1.46	41.08	0.25	18049	117	113	87
IAEA-C2-2	0.350	1.56	41.01	0.28	18050	95	92	44
IAEA-C4-1	0.306	1.50	0.20	0.03	18051	73	92	77
IAEA-C7-1	0.322	1.58	49.76	0.29	18055	100	105	74
IAEA-C7-2	0.348	1.60	50.40	0.35	18056	80	87	33
IAEA-C8-1	0.298	1.54	15.45	0.15	18057	105	105	71
IAEA-C8-2	0.333	1.57	15. 60	0.18	18058	96	82	36

2-5. グラファイト化

新しいグラファイト化ラインに反応器、試料 CO₂が封入されたパイレックス管をセットし、すべ てのバルブを開き、約1時間、ライン全体を十分に真空に引いた後、約530 mbar の H₂を導入し、 Fe 粉触媒を 420℃で1時間再還元した。試料 CO₂を反応器に導入し、圧力を測定する。その後試料 CO₂を LN₂で冷却して反応器内部の圧力を真空状態に戻し、H₂を H₂/CO₂体積比 2.5 で導入して反 応器のバルブを閉じる。620℃で約3時間加熱して還元する(CO₂+2H₂→C+2H₂O)。反応器の下端に 約-100℃のエタノール/LN₂混合物をセットし、副生成物の H₂O を急冷、回収する。表1の試料 a)、 c)、f)はグラファイト化の経過を観察するために、反応器内の圧力を5分おきに記録した。また、 本研究では従来のグラファイト化よりも H₂/CO₂比を大きくしているが、過剰に H₂を用いて長時間 グラファイト化を行うと、生成したグラファイトが H₂ と反応してメタンなどを生成して反応器内 部の圧力が再び上昇してしまう可能性がある。そこで、長時間反応させた場合の反応器内の様子を 観察するために b)は5分おきに6時間圧力を記録した。

Fe 表面に生成したグラファイトは回収し、1.5 mm 径の穴のアルミニウムターゲットに詰め、名 古屋大学のタンデトロン AMS(HVEE model 4130-AMS)によって ${}^{14}C/{}^{12}C$ を測定した。測定は2また は3回行われた。

3. 結果

3-1. グラファイト化の経過

試料 a)、b)のグラファイト化の経過を図 2 に示した。いずれの試料も約 3 時間で圧力の低下が止まり、グラファイト化反応が完了した。途中、圧力が上昇している個所があるが、これはエタノー ル/LN₂混合物の温度調整を行うために取り外した際のもので、その後十分に圧力が低下しているの で問題ない。また、長時間グラファイト化を行っても、反応器内部の圧力が上昇するといったこと は見られなかった。



圧力変化 6h



Fig. 2. Graphitization reaction rates for various sample masses using new graphitization protocol 図 2. グラファイト化反応器内の圧力変化

3-2. グラファイト化効率

グラファイト化の経過を反応器内部の圧力によって観察したため、Hua et al.(2001)と同様に、以下の式によってグラファイト化効率を算出した。

<u> グラファイト化前の圧力-グラファイト化後の圧力</u> 効率(%)=<u>3×CO</u>2の圧力 ×100

ここで、グラファイト化前の圧力(未反応の CO₂と H₂による圧力)からグラファイト後の圧力(反応 せずに残った CO₂と余剰のH₂による圧力)を引くことでグラファイトに還元された CO₂の正味の圧 力を求め、試料 CO₂がすべて反応したと仮定した場合の圧力(試料 CO₂の圧力と、H₂の圧力(試料 CO₂の二倍))に対する割合を求めている。図 3 に、試料量の違いによるグラファイト化効率を標準 試料の種類ごとにプロットした。0.2~0.5 mgC の範囲では、ほぼ 100%の安定したグラファイト化 効率が得られた。0.2 mgC 以下になると、効率が下がる傾向がみられ、0.07 mgC では、70~100% のばらつきを示した。



Fig. 3. Graphitization yields *versus* sample masses 図 3. 炭素量に対するグラファイト効率

3-3. ¹⁴C 測定結果

¹⁴C 測定結果を表 1、表 2 に示した。試料量の違いによる ¹²C³⁺ビーム強度を、測定回数ごとにプ ロットした(図 4)。いずれも試料量が減少するにつれてビーム強度は低下している。特に、0.2mgC 以下では大きく低下する。Run 1 が最もビーム強度が高いものが多く、測定が進むにつれてビーム 強度が低下する傾向にある。通常の測定(約 1.5mgC、鉄触媒 3mg)で得られる 150~230nA 程度のビ ーム強度に対して、最も低い 9 nA (HOx-II-8-9, 0.111 mgC, Run 3)から最も高い 191 nA (Dead-1, 0.554mgC, Run 2)まで、全体に低い値となった。



Fig. 4. ¹²C³⁺ beam currents *versus* graphite sample mass 図 4. 炭素量に対するビーム強度

また、炭素量が小さくなるにつれてビーム強度も低くなり、特に 0.2 mgC 以下では強度の低下が 大きくなる。本研究において Fe 粉触媒量が実際には 1.0-1.5 mg であり、Fe/C 比は 1.8-19.5 であっ た。同じ炭素量の試料であっても、Fe/C 比が高くなるものほど¹²C³⁺ビーム強度は低くなる傾向が 見られた。Fe/C=1.8-4.2 であった 0.5 mgC の試料では、Fe/C=2.5 において最も高いビームが得られ ている。Fe 触媒はグラファイトの電気伝導性を得るためにも重要であるが、過剰になるとビームが 得られなくなる。その他の炭素量の試料においても同様に Fe/C=2.5 程度とするのが良いと考えられ るが、最終的に得られるグラファイトが非常に少量となり、ターゲットに詰めた際の厚みが不足し てビームが得られなくなる可能性がある。

HOx-II(1.5 mgC)で規格化し、¹³C/¹²C による補正を行った ¹⁴C 濃度はいずれの試料も推奨値に近い 値が得られた(図 5, 6)。しかしながら、Run 3 におけるビーム強度が 20 nA を下回るもの(図 5、●で 示したプロット。〇プロットは、Run 3 におけるビーム強度が 20 nA 以上のもの)は推奨値からの逸 脱が大きく、信頼性が低いものと考えられる。それぞれの試料で試料量にかかわらず偏差を求める と、HOx-II(1.5 mgC)で 0.2%、HOx-II(0.0752-0.52 mgC)で 1.2%、IAEA-C8(0.0675-0.464 mgC)で 1.1%、 IAEA-C5(0.0759-0.492 mgC)で 0.8%となる。1.5 mgC の HOx-II に比べて 5~6 倍の偏差を持つ。条 件は異なるが、Hua et al. (2001)では 0.1 mgC の試料に~2%の偏差を得ており、0.07-0.55 mgC の試 料量では低い値であると考えられる。



濃度は HOx-II (0.3mgC)で規格化し、
¹³C/¹²C による補正を行った。いずれの標準試料も推奨値に近い値が得られ、
R²=0.9998 の高い相関関係を持つため、
新しいグラファイト化システムを用いて
精度・確度の高い微少量試料の測定を行うことが可能であると考えられる。



Fig. 7. ¹⁴C concentrations of IAEA-C1, -C2, -C4, -C7, and -C8 図 7. IAEA-C1, -C2, -C4, -C7, -C8 の ¹⁴C 測定結果

3-4. ブランク値

バックグラウンド試料として用いた ¹⁴C-free HOx-II の ¹⁴C 濃度を図 8 に示した。グラファイト化 において 0.5-1.8 μ g MC のコンタミネーションを受けている。これは Hua et al. (2001)と同程度の値 である。



Fig. 8. ¹⁴C concentrations of ¹⁴C-free HOx *versus* graphite sample mass 図 8. 炭素量に対するブランク値

4. 考察

新しいグラファイト化ラインを用いて、0.1mgC の微少量の試料においてもグラファイト化が可能であった。炉の温度は両端がやや低くなるため、最も温度の低かった2番の炉に調節用の熱電対を接続し、目的とする温度よりも10度高く設定した。430℃に設定した場合、実際には420-450℃になり、630℃に設定した場合、実際には620-650℃になる。グラファイト化効率や¹⁴C 濃度の測定結果から、炉の温度のばらつきは結果に影響しないと考えられる。

Hua et al. (2001)の結果でグラファイト化効率が質量の減少に伴って低下したのと同様に、本研究においても0.2 mgC以下の試料でグラファイト化効率の減少する傾向がみられた。¹²C³⁺ビーム強度、¹⁴C/¹²C比も同様に試料量の減少に応じで減少する傾向がみられた。しかし、¹⁴C濃度は¹³C/¹²C値を用いて適切な補正を行うことで、0.07-0.2 mgCの試料でも信頼性のある¹⁴C測定を行うことができた。標準試料として用いる HOx-II や¹⁴C-free HOx-II は 0.2 mgC 以上で通常の 1.5 mgC 測定と測定結果がほぼ同じであった。したがって、0.2 mgC 以上の試料においては通常の 1.5 mgC 標準試料を用いても得られる¹⁴C 結果に問題がないことが示唆された。一方、0.2 mgC 以下では試料炭素量と同じ炭素量の標準試料を用いて測定を行う必要がある。また、3 回目の測定においてビーム強度が 20 nA を下回るものは推奨値からの逸脱が大きく、測定結果の信頼性が低いことが分かった。

¹⁴C-free HOx 0.12-0.55 mgC では 0.5-1.8 μg MC のコンタミネーションを受けたと考えられ、その 主な原因は Fe 触媒、反応器、還元に用いた水素などが挙げられる。試料量の少ないものがわずか にその影響を受けやすいが、この新しいグラファイト化ラインでは十分ブランク値を低減できてい る。今後、さらに微少量で精度の良い ¹⁴C 測定を行うために、水の回収方法や Fe 触媒の種類、Fe/C 比などを変更し、改良を行いたい。

謝辞

本研究に際し、炉の作成などにご尽力いただいた名古屋大学大学院環境学研究科の北川浩之教授に感謝の意を表します。

参考文献

- Hua, Q., Jacobsen, G.E., Zoppi, U., Lawson, E.M., Williams, A.A., Smith, A.M., McGann, M.J. (2001) Progress in Radiocarbon Target Preparation at the ANTARES AMS center. RADIOCARBON, Vol. 43, Nr 2A, 275-282.
- Hua, Q., Zoppi, U., Williams, A.A., Smith, A.M. (2004) Small-mass AMS radiocarbon analysis at ANTARES. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B, 223-224, 284-292.
- Matthew, S.K., Xu, X., Trumbore, S.E. (2009) Small-mass graphite preparation by sealed tube zinc reduction method for AMS ¹⁴C measurements. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B, 268, 927-930.
- Minami, M., Nakamura, T. (2010) A first step toward small-mass AMS radiocarbon analysis. Summaries of Researches Using AMS at Nagoya University, XXI, 166-169.
- Santos, G.M., Southon, J.R., Druffel-Rodriguez, K.C., Griffin, S., Mazon, M. (2004) Magnesium perchlorate as an alternative water trap in AMS graphite sample preparation: a report on sample preparation at KCCAMS at the University of California, Irvine. RADIOCARBON, Vol. 46, Nr 1, 165-173.
- Santos, G.M., Southon, J.R., Griffin, S., Beaupre, S.R., Druffel, E.R.M. (2007) Ultra small-mass AMS ¹⁴C sample preparation and analyses at KCCAMS/UCI Facility. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B, 259, 293-302.
- Smith, A.M., Hua, Q., Williams, A., Levchenko, V., Yang, B. (2009) Developments in micro-sample ¹⁴C AMS at the ANTARES AMS facility. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B, 268 (2010) 919-923.
- Xu, X., Trumbore, S.E., Zheng, S., Southon, J.R., McDuffee, K.E., Luttgen, M., Liu, J.C. (2007) Modifying a sealed tube zinc reduction method for preparation of AMS graphite targets: Reducing background and attaining high precision. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B, 259, 320-329.

日本語要旨

0.5 mg 以下の炭素を含む試料の測定を目的とした新たなグラファイト化ラインが構築された。この新しいグラファイト化システムでは、グラファイト化反応器を従来よりも低容積にし、副生成物の水を-90℃で冷却除去、さらに H₂/CO₂比を大きくすることにより反応(CO₂+2H₂→2H₂O+C)を促進させ、グラファイト化効率や反応速度の増大、汚染炭素の低減を図っている。触媒として用いた Fe 量は約 1.5 mg とし、またターゲットも従来の 2.0 mm 径の穴のものから 1.5 mm 径の穴のものに 変えることで、グラファイトの厚みを十分にし、Cs ビームによるスパッタリングでグラファイト が無くなってしまわないようにした。また、新しいグラファイト化ラインの構築に伴って、専用の 炉を作成した。

本研究ではこの新しいグラファイト化ラインの検討のために、HOx-II、2 種類の¹⁴C 世界標準試料(IAEA-C5、IAEA-C8)および¹⁴C-free HOx(0.07-0.55 mgC)の測定を行った。¹²C³⁺ビーム強度は炭素量が減少するにつれて弱くなり、¹⁴C/¹²C 比も減少する傾向がみられた。しかし、¹³C/¹²C 比による同位体分別の補正を行うことで、正しい¹⁴C 濃度を得ることが可能であった。従来と比較した新しいグラファイト化ラインと作成した炉についての詳細と、標準試料を用いたグラファイト化ラインの信頼性の検討について詳しく説明する。